

二つ以上の形容詞的修飾語のかゝることもありますから、注意しなければなりません。

すると、次のやうに見つかります。

おほりの――水は

白い――やぐらは

最後に、修飾語に他の修飾語がかゝつてゐないかを調べて見ます。すると、次のやうなのが見つかります。

しげった――松の――間に

即ち、これは副詞的修飾語に形容詞的修飾語がかゝり、その形容詞的修飾語に、更に他の形容詞的修飾語がかゝつてゐるのです。この時には、形修が形修にかゝることもあれば、形修が副修にかゝることもあり、又、副修が副修にかゝること
もあれば、副修が形修にかゝることもあります。よくその場合によつて見極める

ことが必要です。そればかりか、一つの修飾語に對して二つ以上の修飾語のかゝることもありますから、一層注意が肝要です。

第三に、各文節のくみだてをしらべます。即ち、各の文節がいくつの語から成り、その語が如何なる品詞であるかを調べます。

おほりの 水は しづかに 明かるく、

白い やぐらは くつきりと そびえ、

しげった 松の 間に、

おやねが かうかうしく 見えます。

こゝで同時に、觀念語であるか形式語であるかも分る譯です。

第四に、各語の品詞にもとづく性質を調べます。この時大切なことは、若しそ

の語が活用する語であつたら、その活用の種類とその活用形の種類（何活用形）とを明らかにしなければなりません。次はそれを明らかにしたものです。

- しづかに……………ナリ活用 形容動詞 中止形
- 明かるく……………(ク活用) 形容詞 中止形
- 白 い……………(ク活用) 形容詞 連體形
- そびえ……………ヤ行下一段活用 動詞 中止形
- しげっ……………ラ行四段活用 動詞 連用形 (音便形)
- かうがうしく……………(ク活用) 形容詞 副詞形
- 見 え……………ヤ行下一段活用 動詞 連用形
- た……………完了助動詞 連體形
- ま す……………敬語助動詞 終止形

又、それが助詞である時には、その助詞の種類と用法を調べます。

- の……………格助詞 形修を作る。
- は……………係助詞 とりたてていふ。
- に……………格助詞 副修を作る。
- が……………格助詞 主語を示す。

五

以上で語法に就いて大體の輪廓を述べましたから、次に少し語法の内容に入つ調べて見ませう。

先づ文ですが、文は文節で出来てゐて、一つのまとまつた意味を表すものです。文が文節で出来てゐるといふことは、文が語のまとまつたものでくみだてられてゐるといふことです。いくら語が集つても、まとまつてゐない時には文といふことが出来ません。

りこはな 早く なって おなりなさい 軍馬に 大きく
これでは何のことかさつぱり分りません。

早く 大きく なって、 りっぱな 軍馬に おなりなさい。

〔よみかた三〕 八十頁八十一頁

これではじめて意味が通じます。くみたてといふのは、このやうに一つのまとまりをもつた構造を作ることです。文節と文節との關係にまとまりがつくといふことです。文節と文節との關係にまとまりがつくためには、

何が どうする。(花が 咲く。)

何が どんない。(色が 美しい。)

何が 何だ。(それは 櫻だ。)

といふ關係が成り立たなければなりません。この「何が」に當るものが主語であり、「どうする」「どんない」「何だ」に當るものが述語です。即ち、文にはど

うしても主語と述語とが必要だといふことになるのです。けれども、よくしらべてみますと、文の中には、主語とも述語とも分らないもので出来てゐるものがあります。又、一文節だけで出来てゐるもの、しかも、その一文節が一語だけで出来てゐるものがあります。

たゞいま。

おはやう。

入らつしやい。

ありがたう。

おめでたう。

起きろ。

進め。

おや。

あら。

一九二

右はいづれも一つの文です。一つの文でありながら、一文節で出来てゐます。しかも、その一文節が一語で出来てゐます。私たちが日常使つてゐる言葉の中には、かういふのが澤山あります。これは、主語とも述語ともきめられないやうなものです。一つのまとまつた意味を表してゐますから文です。

今日は。

御機嫌よう。

さやうなら。

お大事に。

すみません。

御免下さい。

右も一文節から出来てゐる文ですが、この文節は二語若しくはそれ以上の語から

出来てゐます。しかし、主語とも述語ともきめられない點では、前の例と同じです。まとまりといふのは、必ずしも二つ若しくは二つ以上の文節間のみ成立するものでないことに注意しなければなりません。文の大切な條件は、語の數とか、文節の數とかにあるのではなくて、意味のまとまりにあることに注意すべきです。

そこで、考へてみなければならぬのは、文の中に於ける文節と文節との關係にどんなものがあるかといふことです。その一つは、前に述べた主語と述語との關係です。これは文節の關係としては、非常に大切なものです。その型は、これも前に述べた通り、

何が——どうする。(花が 咲く。)

何が——どんなだ。(色が 美しい。)

何が——何だ。(それは 櫻だ。)

の三つです。その二は、修飾語と被修飾語との関係です。修飾語には、形容詞的修飾語(連體修飾語)と副詞的修飾語(連用修飾語)との二種類がありますから、その型は次の如くになります。

(一) 形容詞的修飾語

どんな——こと。(よい 考。)

どんな——もの。(美しい 花。)

(二) 副詞的修飾語

どんなに——なる。(はやく 流れる。)

どんなに——する。(おいしさうに 食べる。)

どんなに——どんなに。(大變 早く 走る。)

どんなに——どんなだ。(非常に むづかしい。)

普通に、形容詞的修飾語は體言を修飾し、副詞的修飾語は用言又は副詞を修飾すると言はれてゐます。しかし、その被修飾語の體言や用言は、文のすべての成分になることが出来るのですから、成分をもとにして、その修飾語のかゝり方を考へますと、次のやうになります。

(一) 形容詞的修飾語

主語を修飾するもの。(美しい 花が 咲いた。)

述語を修飾するもの。(これは 面白い 本です。)

副修を修飾するもの。(早い 汽車に 乗りました。)

(二) 副詞的修飾語

主語を修飾するもの。(大變 強いのが 来ました。)

述語を修飾するもの。(水が たのしさうに 流れます。)

形修を修飾するもの。(これは ←形修 少し ←副修 むづかしい 問題です。)

副修を修飾するもの。(もつと ←副修 綺麗に 書きなさい。)

文中に於ける文節と文節との関係は、大體右の主語と述語との関係と、修飾語と被修飾語との関係との二つですから、これがどういふ風に重なりあつてゐるかを調べればよいのです。文章の意味がはつきり分るといふことは、語法的に言ひますと、この文節相互間の関係の明瞭になるといふことです。

こゝで一寸注意してもらひたいことは、文節の中には獨立語といふのがあつて、主語・述語・修飾語のいづれとも直接に關係しないといふことです。(けれども、これもよく考へますと、他の成分―主語・述語・修飾語―と全く無關係であるといふのではなくて、意味上は連なつてゆくのですが、主語と述語との關係、

修飾語と被修飾語との關係ほど、直接の關係がないといふだけのことです。)この獨立語には次のやうにいろいろの種類があります。

(一) 接 續 語

彼は 力づよい しかも 低い 聲で 言ひました。
一體 この 槍は 長いのか、それとも 短いのか。

(二) 感 動 語

まあ、それは 大變でしたね。
なに、そんな 事は 構ひません。

(三) 呼 掛 語

山本さん、一寸 こゝへ 來て下さい。
先生、これは 何ですか。

(四) 應 答 語

はい、私は 帝國軍人であります。
いゝえ、それは 間違ひです。

(五) 提 示 語

宣傳、それが 支那軍の 唯一の 戦法である。
事務は、私たちが 之を 處理します。

六

文の次に問題となりますのは、當然、語です。語がなければ文節も文も出来な
い譯ですが、語法としては、文をよくみると、それは文節から出来てをり、文節を
よくみると、語から出来てゐると考へられます。文の成分である文節にいろく
の種類があつたやうに、文節を作つてゐる語にもいろくの種類がある譯です。
この語の種類を考へる時、單語といふ言葉がよく使はれます。語といふのも、單

語といふのも實は同じものをさすのです。しかし、單語とは如何なる概念かとい
ふことになりますと、必ずしも簡單ではありません。

單語は意味をもつてゐる言語上の一つの單位で、之をもつて文節を構成するも
のです。文節は文を構成する成分の單位ですから、結局、單語といふものは、文
を構成する言語の最も小さい單位だといふことになります。さうして、文は一つ
のまとまつた意味をあらはしてゐるものですから、單語といふものは、まとまつ
た意味を作りあげる一つの部分をなすものであります。従つて、文を意味にした
がつて分解して行つて、これ以上分解すれば、語としての意味を失つてしまふと
いふ所まで行つた單位が單語といふことになります。

春が 來て 吉野山には 美しい 山櫻が 咲きました。

右の文は、右の分別がきの通り六文節から成つてゐますが、單語としては、次の
十三語から成つてゐます。

春が来て 吉野山には美しい 山櫻が咲きました。

何故これを右のやうに十三の單語に分けることが出来るでせうか。それは、十三の各々が一つ／＼別々の意味を表してゐるからです。さうして、これを十三以上に分ければ、各々がその意味を破壊してしまふからです。しかし、よく見ますと、右の十三の單語の中には、「吉野山」と「山櫻」といふのがあります。これは、「吉野」と「山」、「山」と「櫻」とに分けられるではないかといふ疑が起るかも知れません。なるほど、その通りに分けることが出来ます。しかし、さういふ風に分けますと、元の意味即ち、文全體から来るその單語の意味が破壊されてしまふのです。「吉野山」といふのは、「吉野」と「山」といふ意味ではなくて、「吉野山」といふ一つの山の名稱なのであり、「山櫻」といふのも、「山」と「櫻」といふ意味ではなく、又、「山」の「櫻」といふ意味でもなく、「山櫻」といふ櫻の一つの種類の名稱なのです。このことは、言語の意味ばかりから言ふことではなくて、言

語の他の要素である音の方からも言へることです。即ち、單語といふものは、いつもそれだけを一つ／＼きに發音するものであつて、決してその途中で切つて發音することがありません。「吉野山」は實際の發音として、決して「ヨシノ」「ヤマ」と切つて發音しませんし、「山櫻」もいつも「ヤマザクラ」と一つ／＼きに發音します。ところが、右の文中「春が」も「来て」も、「吉野山には」も「山櫻が」も「咲きました」も、すべてみな一つ／＼きに發音します。しからば「春が」「来て」「吉野山には」「山櫻が」「咲きました」はそれだけで一つの單語かといふことになります。ところが、事實は前に十三に分けた通りに分けるのが單語の正しい分け方でありまして、右の分け方は文節としての分け方です。文節としてはこれでよいのですが、單語としてはこの分け方では不十分です。何故かといひますと、「春が」「春の」「春に」「春を」の如く「春」といふ言葉は、下につく「が」「の」「に」「を」に従つて、その文節としての性質を異にします。

又、「春が」「山が」「川が」「水が」のやうに、「が」といふ言葉は、同じ性質の文節即ち主語文節を作りますが、上にある語に従つて、その文節の表す内容を異にします。これはつまり、「春」と「が」とが別々の單語であるといふことを物語つてゐるのです。同じやうに、次の如く、

來て 來た 來ない 來ます……「來」が一單語

來て 見て 起きて 捨てて……「て」が一單語

吉野山には 吉野山こそ 吉野山まで……「吉野山」が一單語

吉野山には 京都にも 大阪でも ……「に」「は」がそれぞれ一單語

咲きました 咲きかける 咲きつく……「咲き」が一單語

咲きました 読みました 取りました……「まし」が一單語

咲いた 見た 書いた ……「た」が一單語

比べてみると、それぞれが十三に分けた通りの單語以外に分けられないことが分

ります。

橋本進吉博士が次のやうに言つてをられますのは、この場合いかにも尤もと思はれます。

つまるところ、いつも一つどきに發音するものの中に、左の如き種類があります。

(a) やま。おもふ。しろい。さて。あゝ。

(b) やまかぜ。ほんばこ。手輕い。

(c) お茶。私ども。あなた様。春めく。

(d) 私です。思はない。思つた。

(e) 私が。私の。私も。

(a)は、意味からいつて、それ以上分解出来ないもので、これは疑もない單語です。(b)以下は、意味からはもつと分解出来るものですが、そのうち(b)は、「やま」と「かぜ」、「手」と「軽い」のやうに(a)の種類の單語を合せて出来たものですが、出来上つた上は

一つづきに發音し、且つ、その文法上の性質が(a)の單語の何れかと全く同じく、品詞の一つに屬するものとして取扱ふことが出来るので、これも單語と認めます。(c)以下は、(a)の種類の單語に、單獨では用ひられない「お」「ども」「が」「です」などが加はつたものでありますが、その中(c)は品詞の一つに屬するものとして取扱ふことが出来ます故、全體を一つの單語と認め、附屬したものは接尾語接頭語と名づけます。(d)は、全體を品詞の一つに屬するものとして取扱ひ得るものでありますが、「です」「ない」などを單語とみとめ、他の單語に單語が加はつたものとしめます。(e)は、全體として或品詞に屬するものと見る事が出来ない故、一つの單語とせず、單語に單語の加はつたものと見るのであります。

これまで單語といはれてゐるものを、そのまま認めて、理論上より説明すれば、右のやうな煩雜なものとなります。即ち、單に意味の上からのみ分解して、その最小の單位をもとめると、その單位は、(a)(d)(e)に於て今いふ單語と一致しますが、(b)(c)に於ては一致しません。又、いつも一つづきに發音するものといふ事を標準にしてみれば、(a)

(b)(c)に於ては今いふ單語と一致しますが、(d)(e)に於ては之と一致せず、助動詞や助詞が接尾語と同種のものとなります。つまり今いふ單語といつてゐるものは、不徹底なものだといふ事になります。(「新文典別記」)

かういふ風に、單語といふものは、理論的に考へますと、むづかしいものですが、私たちの實際の言語生活の中では、自由に使ひこなされてゐるものです。さうして、私たちの談話やら文章やらの基礎的單位をなしてゐる極めて大切なものです。

七

前項で述べた單語が、獨立で文節を構成することの出来る觀念語と、いつも觀念語に附屬してでなければ文節を構成することの出来ない形式語とに分けられることは、既に説明しました。この形式語が觀念語に附屬してでなければ文節を構

成することが出来ないといふことは、形式語のもつてゐる性能から來ることでもあります。帽子といふものは、いつも頭の上に冠られるものです。靴といふものは、いつも足に穿かれるものです。それは帽子と靴の性能から來ることです。實際に私たちが言葉を口に出して發音します時には、形式語は必ず觀念語と一つどきに發音します。離して發音するといふことは絶対にありません。之に反して、觀念語は形式語と切りはなしても發音することの出来るものです。私たちの頭は帽子を冠らずとも頭のはたらきはしますし、私たちの足も靴を穿かずとも足のはたらきはします。しかし、帽子や靴の用といふものは、頭をはなれ、足をはなれては果せないものです。これは、その用の性質から來ることです。

かういふ風に考へて、觀念語について、その意味やはたらきや形のちがつてゐるものを調べてみますと、その中に幾つかの種類のあることが分ります。又、形式語も同様にその意味やはたらきや形に従つて、之を分類することが出来ます。

これがいはゆる單語の種類で、分けられた一つ一つの言葉の類を品詞といひます。このやうに、單語を品詞に分類して考へますのは、單語が文節を構成し、文節が文を構成する時に、いひかへれば、語が文を構成するに當つて、如何なる語は文の如何なる成分となるかといふことを説明するのに都合がよいからです。さきに言ひましたやうに、語にはそれぞれ性能といふものがありますから、文の成分となる時には、その性能に従つてはたらかなければなりません。たとへば、語と語、文節と文節、文と文をつなぎあはせる役目だけしかない語があります。又、他の語を修飾するつとめだけしかない語もあります。さうかと思ふと、他の語を修飾することも出来れば、述語になることも出来るものもあります。更に、主語にもなれば述語にもなることの出来る語もあります。語の中には活用といつて語の形の變化するものがあることは、皆さんの既に知つてゐる通りですが、これも、みなこの文の成分となつて語がはたらく時の役目に應ずるためです。決し

て無駄に活用などしてゐるのではありません。このやうに、文の成分を構成する語の性能に従つて、語を分類して品詞をたてるといふことは、語法の研究に於ては大切なことです。この大切な品詞分類の作業の目的が、語が文の成分となる性能を明らかにすることにあることを忘れてはなりません。さうして、この分類の仕事が先に述べました意味と形態と機能の三つを標準にして行はれることも注意しなければならぬことです。

今、語をこの意味と形態と機能との三標準に従つて分類してみると、次の十二の品詞になります。その手續は次の通りです。

- (一) あらゆる語を、文節構成のし方によつて観念語と形式語と分けます。
- (二) 観念語と形式語とを、それぞれ、活用のある語と活用のない語とに分けます。

(三) 観念語で活用のある語(用言)を意味に従つて三分します。(動詞・形容詞・形容動詞)

(四) 観念語で活用のない語を、主語となり得るもの(體言)と主語となり得ないものに分けます。

(五) 右の主語となり得るものを、意味に従つて三分します。(名詞・代名詞・數詞)

(六) 同じく主語となり得ないものを、修飾語となるもの(副詞)と修飾語・述語とならぬもの(獨立詞)とに分けます。

(七) 右の修飾語となるものを、それによつて修飾される語が體言であるか用言であるかによつて二分します。(連體詞・副詞)

(八) 同じく修飾語・述語とならぬものを、意味によつて二分します。(接續詞・感動詞)

この十二品詞の一々の特質を明らかにし、以て國語のもつ語法的性質を説くことは、皆さんが既に、文法の中で、品詞論として、大體は學修されたことと思ひますので、こゝでは省略します。たゞ、その品詞論は、單に品詞の特性を特性として明らかにするだけのものではなくて、どんな語が文のどんな成分となる性能をもつてゐるかといふことに於て、研究されるべきものであることをかさねて注意するにとゞめておきます。

八

以上は、國語の語法に關して、ほんの輪廓の一部分を述べたにすぎません。これだけでは、語法といふものは、どう考へ、どう研究してゆけばよいかといふことが、十分には分らないかとも考へます。それは皆さんの今後の研究にまつべきものと思ひます。こゝに語法の章を終るに當つて、特に皆さんの注意を喚起した

いと思ふ事があります。それは、國語には嚴然たる語法的法則のあるといふことです。さうして、この語法的法則によつて、國語は一絲亂れぬ秩序と體系を保つてゐるといふことです。整然たる國語のこの秩序と體系を示す語法は、同時に、日本民族の精神が國語に現れたものであるといふことです。私たちが語法を學ぶのは、單なる言語の外形的規則のみを學ぶではありません。その底に横たはり、長い歴史を通じて、國語を生かし、それによつて國民を養ひそだてて來た日本精神を學ぶことです。簡單だと思はれてゐる助詞や助動詞の用法の中にも、私達の祖先の精神的血液が流れてゐるのです。文の成分として主語が現れて來ることの少い表現法の中にも、日本民族のすぐれた精神がふくまれてゐるのです。國語の正しい學修は、又、語法の正しい學修でもなければなりません。語法を形式視し、語法の學修を輕視するが如きことあらば、それは、日本國民として誠に恥づべきことであると言はなければなりません。私は、祖國を背負つて立つ青少年學

徒が、眞の國語の學修態度を確立するのは、今にしてその最も切なるを覺えるのであります。國語の學修は「學習」でなくて、「學修」であります。私たちは、國語を學ぶことによつて、日本國民たるの道を修めなければならぬのであります。

今度新しく出來ました國民學校の國語の教科書の中に、「コトバノオケイコ」といふのがあることは、皆さんも知つてゐると思ひますが、その中に次のやうなのがあります。

デアフ

デアヒマス (一ノ五十六頁)

ムカフカラ 犬ガ來マシタ

オニノ タイジャウニ ムカヒマシタ

モモトラウヲ ムカヘマシタ (二ノ六十七頁)

これは初等科一年前期の教材です。すでに動詞の活用と五十音圖の同一行の假名

遣の問題があらはれてゐます。皆さんの弟さんや妹さん達は、この時局下にこんな眞剣に國語の整然たる法則に向つて學修をつゞけてゐるのです。私たちもよほどしつかり國語學修の態度をかためなければならぬと思ひます。

「言葉なくして人類の進歩も文明もあり得ません。民族發生以來の文化は國語に依つて傳承されて來ました。國語なくして民族の統合も、特有の精神もあり得ません。かうした自覺が我が日本に近年高まつて來たことは最も慶ばしいことでもあります。國語を愛護する精神こそは、愛國心の本元であり、國の文化を護り發展させて行く原動力であります。我が國今日の急務である「一億一心」の實現も、日本民族が、その共同の寶である日本語を唯一の國語として持つてゐるからこそ可能なのであります。世界各國が羨望する日本國民の團結力に、國語がどれほど大きな力を與へたかに就いては、今さら述べるまでもないと思ひます。世界各國の例を見ても、國語はその國家民族と共に消長してゐます。これを言ひかへ

れば、國語を護り、醇化し、發展させる國家が強大になり、伸長して來ます。それ故、國語の問題は國家民族の根本的な問題で、これを一部有識者の手に委ねて顧みなかつた時代は、もはや過ぎ去りました。こゝに於て、今最も必要なことは、國民全體が國語に関心を持つことであります。それには國民の一人々々が國語の正しい知識と教養とを持つてゐなくてはなりません。また常に流動生育してゐる國語に、系統的な組織を與へなくてはなりません。」（朝日新聞社刊「國語文化講座 第一卷」〔國語問題篇〕序）といふ言葉は、専門の國語學者から出たものでなくて、現下日本の巷にあふれる聲として、意義深いものがあると思ひます。私たちの語法學修の心構の中にも、この心持がなくてはなりません。

心をあはせて、まつすぐに、日本のために、日本國民として、國語學修の道に、ひたすら進まうではありませんか。（終）

索引

ア

「あゝ」……………三三・三六・三七
 「あゝ、あゝ」……………二元
 「あゝん、あゝん」……………七
 アクセント……………元・五四・五五・五七・五六
 脚……………七七・七六
 アストン……………一二三
 「あら」……………一九二
 「ありがたう」……………一九二
 アルファベット……………七三
 「行宮」……………九

イ

五十嵐力博士……………一三
 意義……………五〇

意字

一語説……………一三
 「います」……………一三
 意味……………四六・一七二
 意味と形態と職能……………一七・一七四・一七五・二〇八

意味の組み立て

「一口」……………八〇
 「入らつしやい」……………一九
 「いらつしやる」……………一三三

ウ

海上嵐平……………一三
 上田萬年……………九七
 「五月蠅し」……………八〇
 「うん、うん」……………七

エ

英譯萬葉集……………一三
 埃及文字……………七三
 エスペラント……………八七八

オ

音……………九八〇
 音感……………一二三
 音聲……………四六・五〇・五三
 音聲言語……………五七
 音聲と意味……………五〇・五一・五三・五四
 音節……………七〇・七二
 音節文字……………七三・七三
 音の高低……………三三
 音の強弱……………二四
 音の種類……………三三

音の長短	二四	感動語	一九七
音韻	四・四三・四四・四	感動詞	八三七・三〇九・三二一
「御出でになる」	一三三	感動表現	七七七
應舉	一三三	冠	七七七
應答語	一七		
「起きろ」	一九一		
「お大事に」	一九三		
「おはやう」	一九二		
「追ふ」	一三三・一三五		
「おめでたう」	一九一		
澤瀉久孝博士	一九		
「おや」	一九一		
「親芋」	一九		
「親方」	一九		
「親株」	一九		
「親分」	一九		
「親指」	一九		
		力	
		諧聲	一五
		「行爲」	一九
		假借	一九
		假借文字	一九
		買島	一三五
		片假名	一八四
		片假名、平假名字源表	一八
		「かちかち」	一九
		假名	一八六
		假名遣改正問題	一四
		構	七七六
		漢音	一九
		漢字	七七四
		漢字の六書	七
		感動的叫聲	七八元
		キ	
		聽手	九一〇・三
		擬想語	三〇
		擬情語	三〇
		擬聲語	元
		擬態語	元
		吉備眞備	八五
		「行狀」	九
		「きやつ」	八
		「京都」	九

ク

空海	八四	「くゝくゝくゝくゝ」	一六
「下さる」	一三〇	敬語	一〇・一三・一三三
「くれる」	一三〇	「京師」	七
會意文字	七五・七六	形式語	一八〇・一八一・一八三・一八五
繪畫文字	六七・六八	形聲文字	二〇六・二〇八・二一一
外國語	一五四・一五五	形態	七五・七六
畫	七	形態	一七二
活用形の種類	一八	形容詞	二〇九・二一一
活用のある語	二〇八・二一一	形容詞的修飾語	一九四・一九五
活用の種類	一八	形容動詞	二〇九・二一〇・二一一
活用のない語	二〇八・二一一	「けきよけきよけきよ」	四
觀世太夫	一五	「言行一致」	一三八
觀念語	一八〇・一八一・一八三・二〇五	言語	九
		言語活動	一七四
		言語體系	三六四
		言語團體	三六・三七・六
		ケ	
		言語のくみたて	一六
		言語の法則	四
		源氏物語	一〇六
		現代支那音	九
		結繩	六
		コ	
		語	一八九・一九八
		語彙	四・四三・四四・四七・五〇
		「子芋」	一九
		吳音	九
		「子方」	一九
		「子株」	一九
		語感	二三
		「御機嫌よう」	一九三
		國語	八七八・八九〇・九二九・九四・九五
			九六・九七・九八・一〇三・一〇四・一〇五

平假名……………八・八・八四
 品詞……………一八七・二〇七・二一〇
 品詞分類の手續……………二〇八
 品詞論……………一七六・二二二
 文節の性質……………一八三
 文素……………一七六
 文の條件……………一五三
 文法……………三三・六四・一五五・一六六・一七六
 文法學……………一六九
 「まこと」……………一三八・二九二・三〇〇
 「ます」……………一三三
 「燐寸」……………一八〇
 萬葉假名……………一八

フ

ファイヒテ……………一〇三・一〇四
 副詞……………二〇九・二二二
 副詞的修飾語……………一八五・一八六・一九四・一九五
 部首……………一七六
 フローベル……………一五三
 文……………一七五・一七六・一七七・一八九・一九〇・一九三
 文章論……………一七六・一八三
 文節……………一七七・一七八・一九〇・一八八・一九九
 分節……………一八四
 文節と文節との關係……………一九〇
 「まがれ」……………一九三・一九六
 「禍あれ」……………一六六
 「まがれ」……………一六六
 名詞……………二〇九・二一一
 「莫大小」……………一八〇
 身振……………一三三・一三四
 身振語……………一三三
 無分節音……………一七
 「まこと」……………一三八・二九二・三〇〇
 「ます」……………一三三
 「燐寸」……………一八〇
 萬葉假名……………一八

ヘ

表音文字……………六六・六七・七〇
 表語文字……………六六・六八・六九・七三
 偏……………七

ホ

「ほうほけきよ」……………一八四

マ

「禍あれ」……………一六六
 「まがれ」……………一九三・一九六

モ

森有禮……………九一・一四六・一四七
 文字……………一四・五九・六〇・六三・六三・六四・六五
 文字言語……………一七
 文字になる前の段階……………五五・六六
 文字の誕生……………六三
 文字の發達の歴史……………六三
 文字の歴史的發達……………六三
 湯桶讀……………一八
 用言……………二〇九・二一一
 呼掛語……………一九七
 網倉由三郎先生……………一四八

ヨ

用言……………二〇九・二一一
 呼掛語……………一九七

レ

連體詞……………二〇九・二一〇・二一一

ヤ

「やから」……………一二九
 「やし」……………一八
 「やつこ」……………一二九
 「八重葎」……………一三三
 山田孝雄博士……………一三九・一四〇・一四一
 「やる」……………一三〇
 「災あれ」……………一三六
 「まこと」……………一三八・二九二・三〇〇
 「ます」……………一三三
 「燐寸」……………一八〇
 萬葉假名……………一八

ロ

ローマ字……………一三六

ワ

「災あれ」……………一三六

國語の道終

著者略歴

京都府の人
 明治二十四年生
 奈良女高師教授
 (主なる著作)
 高等口語法講義(目
 黒書店)
 假名遣研究史(贊
 精社)
 高等國文法新講(東
 洋圖書)
 語法の論理(修文館)

昭和七年二月五日印刷
 昭和七年二月五日發行

版權
 所有

國語の道
 |言葉・國語・語法|
 定價壹圓參拾錢

著者	奈良市法蓮町御陵前 木枝増一
發行者	大阪市南區竹屋町二五 出來島雅夫 會員番號一一九〇六三
印刷者	大阪市浪速區稻荷町二丁目九三五 井村雅宥
發行所	大阪市南區竹屋町二五 出來島書店 振替大阪五四六九九番
配給元	東京市神田區淡路町二丁目 日本出版配給株式會社

(本製橋倉)

發刊の辭

出來 島 雅 夫

今日ほど學問の普及が要望せられる時代はない。然るにまた今日ほど學問の無力が嘆かれた時代もない。學問が生活の根底となるところまで身についたものとならなかつたからである。高い學校教育を受けたこと、學問が身についてゐることは違ふ。身につかない學問をさせるかぎり學校がいくらふえても學問は普及したとはいへないのである。

私はかゝる觀點より、國民學校を卒業しただけの素養があれば十分に讀める國民一般教養のための出版を企圖した。深遠な眞理も、苦心の研究も、座談のやうに親しく平易に説き聞かされるのである。分り易いことを通俗と誤認してはならぬ。難解なだけが學問の權威ではないからである。こゝにはやさしく説かれながら權威ある學問が公開せられるのだ。學問の國家的意義は學問が研究室や學校の中のみならず、かく社會一般に公開せられて、國民大衆が學問の恩恵にあまねく浴するところにあらう。本書の執筆者は、彼のハツクスレーの如く、また我が心學者の如く、學問の生活化を指導し教養の普及に徹底を圖つて一般國民を教育することを第一の眼目とせられる。これまでの出版は、専門研究家のための専門書でなければ、低級な興味で釣る俗本であつたといふも過言ではない。私は、未だ曾てなかつた國民一般教育のための圖書を發刊し、微力を盡くして國民文化昂揚の一翼たらんとするものである。

京都帝國大學
教授文學博士

澤瀉久孝著

定價一・三〇

萬葉集講話

本書は中等學校初年級並に一般國民を目標として執筆せられた教養書で、萬葉の代表的な歌を平易・懇切に説明しつつ萬葉集の本質を明らかにし、日本的な物の考へ方とか生活とかにも言及して古典を現代に生かし、在來の研究書のように専門的な立場に捕らはれずしかも直ちに萬葉集の核心に觸れしめる點に於て、著書がその蘊蓄と熱情とを傾けられた書です。敢へて初心者のみならず、國民全部に讀んで頂くべき書なることを確信するものであります。

出版店書島來出

810
KI 14

終